自然追想

今村成和

一

ある年北大を当番校として、札幌で全国の大学の保健管理業務担当職員の研究集会が催されることになった。当番校の学長が特別講演をするのが恒例となっていたが、当時学長をしていた私のところへ、世話役の学生部長から「北大の野草の話なんかどうですか」と言ってきた。

私の専門は法学である。「大勢の人の前でそんな話をしろなんて、見当違いもいいところだ」とは思ったが、丁度その頃、学生部の機関紙の為に書いた「キャンパスの自然」と題する一文が彼の目に止まったらしく、「お堅い憲法論よりは」ということで、試しに持ち出されたことのようである。「成る程それもそうだ」と話に乗ることとして、ついでにスライドも私の写したのを使うことにした。学生部長もそこまでの強心臓とは思わなかったのだろうが、半年後には立派なパンフレットも出来て、企画は成功だったようである。

石狩原野の一部を切り取って、北大の前身札幌農学校の農場としたのは、百年余りも前のことである。今ではここに、巨大な校舎が立ち並び、広いグラウンドが何面もある大キャンパスとなったが、まだほんの僅かながら、石狩の野の昔が息づいているところも残っている。そこでは、校章ともなったオオバナノエンレイソウなど数々の野の花が季節を追って咲き続けているのだが、大学の研究、教育にはあまり係わりの無い場所として、人々には殆ど顧みられることが無い。私のスライドはそこをフィールドとして撮りためたものなのだが、その後多くの友人達の目に触れて、大学における環境保全の必要をPRするのにも、少しは役立ったようである。

二

北海道に住んでいると、大自然に触れる機会はいくらもある筈であるが、出不精の私にはそうも行かない。だがそれ幸いなことには、北大には、幾つかの広大な演習林や牧場があるし、その外にも、海や山に配置された各種の研究施設がある。

道北の演習林にはヒグマも住むということだが、時たまの訪問者に見参の機会が与えられなくても不思議では無い。然し、その住みかとおぼしき辺りを通り通ぎて、峠の上から目路遙かに地平を限る山なみとの間の、広大な演習林を見渡し、それを覆う原生針葉樹林の樹海を見下ろす時、ここが彼らの安住の地であることを、心ひそかに願うのである。

演習林の中を歩けば、あちらこちらに野草や高山植物の群落があるのに出会う。珍しいものと言えば、天塩演習林にあるテシオソウは尾瀬のオゼソウと同じもので、世界的にも、これらの地方にしかないユリ科の稀産種だそうだ。もっとも、草の姿はありきたりの雑草と変わらず、それに目立たない地味な花をつけるだけである。

静内の牧場を訪れた時には、オオバナノエンレイソウが沢山咲いていた。これは、道内の野山では別段珍しいものでは無いが、ここのは、私の知る限りでは、特に花が大きいように思われた。この牧場には、ドサンコが沢山飼われていて、昔の使役馬が、広い囲いの中でのんびりと草を食んでいた。

紋別の流氷研究施設では、ヘリコプターに同乗して、沖合遙かに流氷原の上を飛んで見た。有珠山大爆発の折りには、灰を被って死の街と化した洞爺湖温泉街を通り抜けて、観測所の人達の激励に出掛けたこともあった。

自然との調和の上に成り立つこれらの施設が、北海道の自然保護の上に果たす役割には大きいものがあろう。演習林に隣接して皆伐の跡生々しい国有林の跡地が広がっているのを見た時には、特にその思いに駆られたことであった。

三

北大をやめてから二度ばかり海外へ花の旅をした。

一度は雲南椿を見に遙々昆明まで出掛けた。三月の二十日

過ぎというその時期には、もう花は終わりかけていたが、それでも、名刹太華寺や昆明植物研究所などに咲き残っていた椿は、丈高くのびやかに、色艶やかな八重の花をつけていた。盛りには、一本の樹に数千数万の花が咲き競うという。それは想像して見るより外は無い。

旅立ちを遅くしたのは、この時期にならないと、この旅のもう一つのお目当て、桂林観光のための灘江下りが出来ないためだということだった。桂林ー陽朔間のこの川下りは、南画風の山水が実在のものであることを私達に気付かせ、私達を、画中の人物と共に、夢幻の世界に遊ばせてくれるものだった。昆明の近くにある石林も、視野一杯に巨大な石柱が林立し、ひしめきあっている、日本的な風景観からは想像を絶する奇観であった。このような風景も自然の中には存在すると言うことも、現地に行かなければ実感出来ないことである。それを強く感じさせられた旅であった。

次の年、今度は夫婦で、「アルプスの花と野草を訪ねて」というツアーに参加した。

空路ハンブルグに着き、東独、チェコ、西独、オーストリア、スイス、イタリーを経て、ジュネーブから帰国するまで、九日間の貸切バスでの旅行だったが、その間、ハンブルグ大学の付属植物園を皮切りに、各地の植物園や園芸家の花畑などを訪れた後ミュンヘンの国際園芸展を見て、それからの数日をアルプスで過ごすという大変な強行軍だった。

国際園芸展はさすがに大規模で見事だったが、矢張り心に残るのは、アルプスの山々、花々である。私達が訪れた七月の中旬を季節とする花だったのか、真赤なアルペン・ローズが到る所の山腹を彩っていた。自動車道路が数千メートルの山々を馳せめぐり、両側には色とりどりの高山植物が一面に咲いている。車を止めてその中に足を踏み入れても、何も遮るものはない。

アルプスのサクラソウ

そのある日、私達はスイスのツェルマット駅から登山電車に乗り、途中下車して手頃な草原に腰を降ろし、弁当を開いてピクニック気分を楽しんだ。真向かいには、マッターホーンが白く輝き、傍らには教会が一軒あるだけで、あたりに人の気配は全くない。教会に駐機していた連絡用のヘリコプターが一機、何時の間にか飛び上がって、山の彼方に消えていった。

まわりには、平素見覚えのある花の同類が沢山咲いている。サクラソウ、ミヤコグサ、キンバイ、パンジー、リンドウ、チチコグサ、フウロなど数え上げればきりがない。高山蝶がその辺りを飛び回っていた。私はカメラを振り回し、出来れば蝶もレンズで捕らえたいと追い掛けた。

こうして私達はアルプスに楽しい思い出を残して帰って来たが、当時から、頭の隅にこびりついていて離れない疑問がある。それは、日本の場合に比べて、どうしてこんなに開放的なのだろうか、ということである。

確かシンプロン峠の辺りだったと思う。そこのお花畑では、キャンプ生活をしている家族連れが、裸で日光浴を楽しんでいた。私達も、二、三の場所でバスを止めて花の群生地に分け入り、沢山の写真を撮ったが、私達が気づいた限りでは、立ち入り禁止の所は何処にもなかったように思われる。日本の場合そうは行かないことは、周知の通りである。そして、礼文島の有名なアツモリソウが絶滅に瀕しているというような話を聞くにつけ、これも仕方が無いなと思いはするが、それならアルプスではどうなのだろう。私は今でも不思議に思っている。

（北海学園大学教授）